



鴻
文
会
会
報

第 5 号

発行・鴻文会

753 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

第二回鴻文会総会開かれる

十一月二日於 山口大学大学会館

第二回鴻文会総会は、去る十一月二日、山口大学大学会館大ホールにて開催され、会員四十五名が出席した。事業報告、会計報告が行われ、会則の改正をみたあと、役員改選に移り、会長に和田敏英氏が再選された。この総会の模様については、当日行われた社会学第一回卒業の河野桐果氏による公開講演や、山口大学マンドリンクラブによる演奏、懇親会とともに、二面以下に報告する。

再び鴻文会のために

鴻文会会長 和 田 敏 英

(英米文学・文理第一回卒業)

師走の候、皆様にはいかががお過ごしでしょうか。月日の経つのは早いもので、昭和五十六年秋、わが鴻文会が誕生してから、はやくも満四年が過ぎました。この間、会員の皆さんのご協力はもちろん関係各位のご支援により、鴻文会がほぼ順調に育っておりますことはご同慶のいたりです。

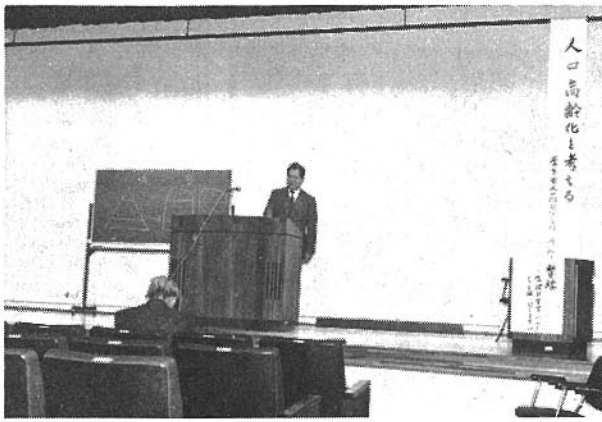
去る十一月二日(土曜日)、今春竣工の山口大学大学会館において開催された第二回総会は、五十名に及ぶ参会者を得て、無事盛会のうちに終了いたしました。総会の模様については、当日の公開講演会、アトラクション、懇親会などとともに、この会報で詳しく報告されています。

さて、皆さん、わが鴻文会はこれから第二段階の成長期を迎えます。同窓会に限りませんが、いかなる団体組織であれ、その外形たる器はできても、それに充実した内容を盛りこる維持発展させていくことは、なかなか容易なことではありません。一回限りの任期という約束に反して、再び鴻文会の会長を務めることになりましたが、皆さんの旧に倍する叱咤激励をお願いしてご挨拶いたします。

第二回総会報告

鴻文会第二回総会の行事は、この五月新装開館した山口大学学生会館大ホールにおいて、午後二時半から開催された記念講演会を皮切りに、その幕を開けた。

記念講演は、文理学部第一回卒業生で厚生省人口問題研究所人口政策部長の河野稠果氏が「人口高齢化を考える」と題して約一時間要旨別項の通り講演された。人口の高齢化問題は一般に暗いイメージで捉えられ勝ちであるが、明るい面もあると、理論と政策の両面に通暁し国際的に活躍中の氏ならではの示唆に富んだお話で、感銘深いものであった。一般聴衆のなかには、県民生部、衛生部など行



政、福祉関係者や本学の教授の他、熱心にメモをとる学生に混って折柄来日中の本学と友好提携している中国山東大学の研究者の顔も見られ、この問題に寄せる社会の関心の高さをうかがわせた。

次いで、アトラクションとして、山口大学マンドリン・クラブの、「ベルシヤの市場に



て」、「日本童謡集メドレー」二曲が軽快に演奏されたのち、午後四時より総会が開催された。

総会は、第五回卒（東洋史）の和田修治氏の司会により、まず副会長長滝本龍也氏（第三回卒・社会）が外国出張中の和田敏英会長に



代り会長挨拶を行った。引続く恒例の学部長挨拶には本年四月に就任した第二回卒（国史）の八木充新学部長が登壇し、最近の人文学部とくに昭和六十年代から発足した大学院人文科学研究科修士課程を中心とする発展状況について報告され、盛んな拍手を浴びた。

議事に入り、議長に第四回卒（国史）の森田良吉氏を選出したあと、第一回総会以後四年間にわたる事業報告、会計報告を第十四回卒（独文）岡光一浩幹事が、会計監査報告を第四回卒（英米文学）行村和男監事が、会則一部改正の提案を第八回卒（西洋史）原田哲矢委員がそれぞれ行い、いずれも満場一致可決された。会則の一部改正は大学院設置に伴い、今後その卒業生を正会員とするためのものである。また名簿作成に關して第十七回卒（国文）の添田建治郎幹事より、報告ならび

に住所不明会員の確認連絡方依頼があり、最後に役員改選について大塚博久副会長（第四回卒・中哲）より、八木充人文学部長を名譽会長に推戴することおよび若干の委員の交替を含む新役員提案があり、これを承認してすべての議事を終了した。

午後五時からは、会館レストランに会場を移し、第四回卒（中哲）大野光生氏の軽妙な司会により懇親パーティーが始まった。同窓生はお迎えした恩師 田中晃、近沢敬一、岩城秀夫、関一雄、木下謙治諸先生の元気なお顔を囲んで、和氣藹々のうちに久闊を敘する交歓、談笑の輪が随所にくり展げられ、刻の移りゆくとともに青春回顧の情もだがたく、グラスの音はいよいよ高鳴るばかりであった。やがて秋冷の気みなぎる午後七時、尽きせぬ想いを抱きながら四年後の再会を期して乾杯幕を閉じたのであった。

それにしても、会員約二、五〇〇名中、総会五十名弱、懇親会三十名の参加者では余りにも淋しい感を否めない。総会開催のため払われた在校幹事諸氏のご努力にお応えするためにも、今後一工夫することが必要のように思われる。
(大塚博久副会長)



鴻 文 会 会 則

〔鴻文会役員〕

(昭和60年11月2日選出)

名譽会長
八木 充 (山口大学文学部長)

会 長
和田 敏英 (英米文学、1回卒、山大人文学部)

副会長
滝本 龍也 (社会学、3回卒、山口家庭裁判所)

委員
大塚 博久 (中国哲学、4回卒、山大教育学部)

渡辺 澄利 (西洋哲学、8回卒、小野田高校)

八木 充 (中国哲学、4回卒、山口高校)

三好 信男 (東洋史学、6回卒、山口高校)

原田 哲矢 (西洋史学、8回卒、山口県教委)

山本 哲夫 (社会学、8回卒、山口県萩保健所)

芳西 靖幸 (社会学、11回卒、山口県立美術館)

小田 稯亮 (国文学、2回卒、山口鴻城高校)

藤満 通 (中国文学、6回卒、山口高校)

竹内 通弘 (英米文学、2回卒、山口高校)

中村 恭亮 (ドイツ文学、14回卒、山口県庁)

監 事
森田 良吉 (国史学、4回卒、山口高校)

行村 和男 (英米文学、4回卒、山口相互銀行)

幹 事
岡光 一浩 (ドイツ文学、14回卒、山大人文学部)

添田建治郎 (国文学、17回卒、山大人文学部)

佐々木 衛 (社会学、19回卒、山大人文学部)

で、四回生の後輩達になるだけ多く接して、人材を求めることであった。全社員数が三百名前後の小企業で、毎年若干名の大卒男子学生を採用することは並大抵のことではなかった。こうして、大学にしばしば出向していたためか鴻文会の第一期役員へ推挙されてしまった。この四年間はあつと思う間もなく過ぎてしまひ、役員として十分にお手伝出来なくて残念な気持である。

和田敏英会長をはじめ学部諸先生方は、鴻文会の設立準備で大変なご苦労をされていたこの四年間の会の運営も、殆んど先生方におんぶされてきたようである。会員の一人として大変感謝している次第です。さて、過日の第二回総会は盛会であった。これで同窓会としての掃蕩期は終わったのではなからうか。今後は大きく飛躍する時期がきたと思う。私達社員がその飛躍のかぎを握っていると言つても過言ではありません。

卒業生も二千五百名をこえるまでになり、毎年百八十名の会員が仲間入りする。仕事や家庭にゆとりの時間をつくり、キャンプを訪ね先生方や後輩達と懇談しようではありませんか。先輩の栄転を祝してグラスを傾けるとか、機会があれば後輩の結婚式の媒酌人をつとめてみましょう。こうした小さな集いが同窓会をより充実させ発展させる秘訣ではないでしょうか。

会員が多くなれば会の運営資金もかさみます。安定した運営を続けるために、また会員の義務としても終身会費の完納が望まれます。先輩、後輩の皆さん、再度納入を確認下されば幸甚です。鴻文会が同窓会としては先輩格の経済学部「鳳陽会」のように飛躍発展することを確信しています。

(山口マツダ(株)山口営業所)

第一期役員を終えて

松崎 孝夫

(社会学・文理第十回卒)

「鴻文会」の誕生をめぐって大学の諸先生方や先輩方が奔走されていた頃、私はある目的をもって出身の社会学研究室を中心に経済学部や農学部を訪問していた。私の目的とは当時勤務先の会社で人事を担当していた関係

(総則) 本会は鴻文会と称し、事務所を山口大学人文学部内におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

一、会報及び会員名簿の発行

二、会員相互の連絡、親睦の増進

三、その他必要と認められる事項

(会費) 本会は次の会員をおく。

一、正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者

二、準会員 山口大学人文学部学生、文学専攻科学生及び大学院人文学部研究科学生

三、特別会員 山口大学文学部文学科旧教員、人文学部教員及び旧教員

(会費) 本会の経費は、会費、寄附金、その他の収入をもってあてる。正会員は終身会費五千円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任を妨げない。

一、会長 一名

二、副会長 二名

三、委員 若干名

四、監事 二名

役員は次の職務を行う。

一、会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。

二、会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

三、監事は会務及び会計の執行を監査する。

委員会は名譽会長に山口大学人文学部長、また会務運営のため幹事若干名を委嘱することができる。

第九条 本会は正会員をもって構成し、四年ごとに開催する。総会は次の事項を審議し、出席者の過半数をもって議決する。

一、事業の報告

二、会計の報告

三、役員を選出

四、会則の改正及びその他の重要事項

(支部) 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

第十条 この会則は昭和60年11月2日より改正施行する。

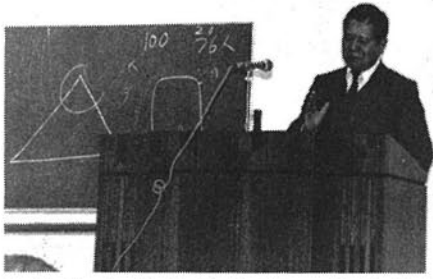
附則 (昭和56年10月31日制定)

公開講演

「人口高齢化を考える」要旨

河野 稠 果

(社会学・文理第一回卒)



学生時代の思い出とか、国連在任時の話とかもしたいが、今回は人口問題に関し、少しまとまったことを申したい。高齢化といわれて久しいが、人口の高齢化というのは、高齢者人口の比率が増加する社会状態を指す。人口構成は発展途上国ではピラミッド型、先進国では釣り鐘型、六五才をさかいに老人が増える高齢化という。もう一つの指標は、六五才以上のいわば現役一五〜六四才の生産年齢人口の比率で示される。この比率は最近急速に変化してきた。昭和初年は一〇%以下、五五年は一三%、一〇〇年には三五%にたつし、高齢化をドラマチックに呈示する。高齢化すると、一つは老人負担(年金・医療費)がふえる。七五年には医療総経費はGNPの一七%となる。医療費の中に占める老人医療費の比率は高い。現在の国家予算はGNP二〇%程度。年金負担も増加する。さらに社会学的にいうと、老人の増加で社会の、

「風とおし」が悪くなる。企業内で昇進しにくくなる。きょうはとくに次の二つのことを申し上げる。一つは高齢化の原因について関連した理解が通用している点、もう一つは高齢化という点、暗いイメージをいだくことが多いが明るい面もある点について。第一点、平均寿命が伸びたから高齢化をまねいたというが、これはあやまりだ。ふつう平均寿命が伸びると人口は高齢化でなく、むしろ若年化する。ただし日本の場合、たまたま寿命の伸び、高齢化がすすんだ。死亡率のメカニズムから、死亡率は生まれた直後が高く、死亡率が低下したのは、乳幼児の死亡が激減したためで、ピラミッドの底辺が広がった。出生率が上がったのと同じことになる。寿命の伸びたことは、乳幼児死亡率の低下、人口の若年化を意味する。だから高齢化の要因は、寿命の伸びたからというより、出生率が下がったためだ。ただ日本の場合、乳幼児の死亡率が頭うちとなり、一方最近五〇才以上の死亡率が改善され、その年齢層がふくらんできた。平均寿命の伸びと高齢化の伸びが一致する、世界で唯一の国となった。一般的には平均寿命の伸びは人口の若年化をまねき、日本だけが乳幼児死亡率のいじむしい低下によって、その効果が高齢化の方に出てきた。

もう一点は、高齢化がすすみ、日本は高齢化のブラックホールに吸い込まれるのではなく心配する人々がいる。しかし明るい話もある。人口構成の変化は、人間投資・人間効率に無駄をなくすようになる。昭和一五年ごろは一〇〇人生まれ、二〇才には七六人、六五才には三〇人がたりつく。現行成人式まで二〇〇〇万円かかるといふ。これだけ投資し、一〇〇人中七六人しか残らないのは大きい損失で、かりにその損失とすると、四〇〇万かけたとしても、損失は膨大である。現在どれだけ得をしたか計算すると、五六兆円の巨額になる。社会保障費は二七兆。かつては生産の担い手の一五〜六四才のうち三〇%しか生きのびなかつたので、その損失はいかに大きかつたか。高齢化といっても、他方で得をすることがある。高齢化にはプラスの面があり、暗いことばかり考えない方がよい。

さらに高齢化の時代がくるといっても、本当はまだ先のことで、私の研究所の見通しだと、一五〜六四才の比率はまだ上がり、子供の比率は下がる。したがって負担の比率も下がる。まだ二〇年の猶予があり、その後本格的な高齢化が押し寄せる。現在はモラトリアムの時代で問題は二〇年後だ。この間が本格的な高齢化にそなえる時期である。何をしたらよいか。老人に働きやすい環境づくりをする。老人は体力・気力・知力がありながら、社会的に退いてゆく。かつては人口構成がピラミッド型で老人は少なく、強壮で知恵があつた時代は年功序列が有効に機能した。しかし今日年齢構成が変化したにもかかわらず、まだ年功序列だ。賃金体系も年功が基準となつている。もうこれは適当でない。今後たとえば賃金体系を改革するなど、本格的な高齢化にそなえる必要があると思う。一億二千万人が叡智をしばらく、来るべき冬にそなえてはならない。

日本は「高齢化」に生真面目すぎはしないか。米国の産業がおこり、高齢化を吸収する。日本社会における最大の社会的相違点は、高齢化にともなう三世代家族の存否であろう。日本の家族のうち核家族六〇%、一人世帯一五%、三世代家族は二五%。米国では三世代同居はまずみられない。子は親と、親は子と住もうとしない。真の親孝行は同居ばかりではなからう。どちらが人間的だろうか。奇矯な考え方もかもしれないが、これも一五年間、じっくり考えた方がよい。高齢化には明暗があり、人間投資・人間資源の真の価値を見直すべきではないか。

(厚生省人口問題研究所人口政策部長)



以上は、昭和六十年十一月二日、第二回鴻文会総会に先だって行われた公開講演「人口高齢化を考える」を、鴻文会役員会の責任において要約したものである。

同窓会に参加して

人文学部の呼称について

田 中 晃

人文学部発足以来、年と共に充実しつゝ、あることは喜びに堪えないところである。ところでこの人文学部の呼称について一言私見を述べて見たい。一般にジンブンガクと呼んでいるようであり、私もそれに異議を唱えようとは思わないが、しかし私見としてはこれをジンモンガクと呼びたいのである。ジンモンと云えば当然、天文(テンモン)、地文(チモン)を連想する。つまり天地人であり、天の道理、地の道理の上に人間の道理が立脚し、人間の道理は天地の道理を自覚実現するところにあるのである。

ところでジンブンと呼べばどうなるか。人文主義はルネッサンス以来の近世文明の標語であり、中世の封建思想を排し人間性の開発を以て至上の命題とするヒューマニズムである。それが近世より現代に至るまでの文明推進の原動力であったことは何人も否定できない。しかしヒューマニズムは人文主義であると共に、一步を進めて人本主義となる。つまり神を否定し自然を征服した人間中心主義である。今日の科学文明、機械文明はこの人間中心主義の所産である。それは確かに人類に幸福をもたらしたが、勢の赴くところ、今や人類を生存の危機に直面させるに至ったのである。NHKの放送「二十一世紀は警告する」が、そのすべてを語っている。罪ふかき人間が神意を無視し、自然より生まれた人間がお

のが母胎を征服したという錯覚が、この危機を招いたのである。



もし人間が中心であるとすれば、それは天地を支配征服するのでなく、逆に天地の道理を安宅として、それに立脚しそれを実現するところにある。それが古来の天地人の思想であり、天文・地文・人文の意味するところである。かくて人文学部の学問は二十一世紀の危機に対して警告を発する人間の英知であるべき使命を有する。私は人文学部という世間の呼称に拘泥するものではないが、その真意は如上の人文学部であることに意を留めてもらいたいと思うのである。

(この一文は昨秋の鴻文会第二回総会における挨拶の主旨である。)
(元・山口大学学長・文理学部教授)

渡し守のつづき

岩 城 秀 夫

太平洋戦争が日一日と激しさを加え、学生が制服を軍服にかえて出陣するようになった頃のことである。長い年月、教育に尽してこられた恩師の一人が、「教育者は船頭と見つけたり」と語られたことがある。

確かに教育者は毎年のように新入生を迎え入れては、卒業生を送り出す。それは渡し舟に乗せた旅人を、水棹や櫂をあやつりつつ、対岸に送りどけるのに似ている。その間、客に事故のないように、細心の注意を払わねばならない。舟が傾いてはならない。また流されてはならない。一見、のどやかにみえる渡し舟の船頭に、そうした重い責任があるように、恩師は教育者としての使命を強く意識され、当時よく語られた葉隠の「武士道は死ぬことと見つけたり」を、巧みにもじられたものと、その頃は受けとっていた。

しかし、その後、年を経るにつれて、恩師はこのことばに、もっと深い意味をこめておられたのではないかと、思うようになった。学徒兵として振り返ることもなく、戦地に赴く教え子の後姿を見送りながら、岸に上つて先を急ぐ旅人の背に、「ご無事な。達者でいて下されよ」と声をかける船頭の思いを、佇立する自分の姿に重ねあわせておられたのではなかったか。

舟を再びもとの岸にもどす船頭は、客の旅先を案じながらも、そのあとを追うて陸路を行くことはできない。舟をあやつる時の充実した使命感とともに、旅人が遠ざかってゆくのを眼で追うときの淋しき、空しさが、このことばにはこめられていたように思う。

幸いにして私が山口大学に着任して以来、そうした悲痛な思いで卒業式に臨むことはなかったけれども、しかしその後の旅路が果して平安であろうかと、夜半の寝覚めに幾人かの顔を思い浮かべることは多い。渡し守の気持ちのわかるこの頃である。

(人文学部教授・中国文学)

明日へ吹く風

関 一 雄

「鴻文会」という名称は、よくつけたものだと思う。その優しいヒビキとともに、その字から深い意味が感じとれる。その第二回総会の懇親会に出席させていただき、旧知の方々に久しぶりでお会いすることができた。人生は、いつてみれば人との出会いと別れのくり返しである。私も五十を過ぎて、その大切さ素晴らしさを感じて、感じようになつた。

偶然が重なって、同じ教室・研究室で三年間を共に勉強した人と、こういう会で再会できるのは、何と素晴らしいことではないか。二、三年前に卒業された方、二十年前に卒業された方、どちらも私の中に生きているのはその人の学生時代であり、卒業生の方々の中に生きている私も又、その時の私なのではなからうか。

お互いに相まみえて、時の流れを感じてもそれを嘆くことはあり得ない。お互いにその頃の自分の活力・夢・恋を思い起し、いささかなりとも衰えたかも知れぬ今の自分に、それをとり戻す機会が同窓会なのである。

この会に、福岡から遥々御参加になつた社会学の近沢敬一先生は、もう間もなく喜寿をお迎えになる御齡と拝見したが、数日後に日本社会学会で、「自由」という語について研究発表なさるという。そのあくなき探求心は現役時代の近沢先生そのままのものである。明日という未来は、その人の胸の内・心の中にいるものであり、それを確かめ合う機会が鴻文会にはある。懇親会が終わって、大学キャンパスから二

キ口程離れた山口線湯田温泉駅まで徒歩で向かう途中、やや冷たい晩秋の風が頬を心地よく撫で、私の心の中は明日へ吹き渡るさわやかな風で一杯であった。

(人文学部教授・国語学)

同窓会に出席して

木下 謙 治

十一月二日、鴻文会の「公開講演」と懇親会に出席した。ちょうど、秋の学会の期日と重なってしまったが、公開講演をされた河野稠東さんが、社会学の第一回の卒業生なのでお話を拝聴し、敬意を表したいと思ひ、学会の方は欠席することにした。いま、私は、「高齢化社会の諸問題」というタイトルの演習を担当しているので、河野さんの講演のタイトル「人口高齢化を考える」にも惹きつけられた。演習の学生たちにも、講演を拝聴するようすすめた。お話の内容は、多面にわたって示唆に富んだものだったが、国際的にみると、寿命の延びは、むしろ、人口高齢化の原因となるものではないといわれたことが強く印象に残っている。

大学会館レストランでの懇親会は、予想よりも出席者の数が少ないように思われたが、なごやかな雰囲気、会がすすむにつれ盛り上がり、終り近くにはシャンソンまでで、たいへん楽しい会だった。ひと言いえば、現職の教官が、もっと出席していたらと思った次第である。

社会学の卒業生は、鴻文会よりも前から、すでに「山口大学社会学同窓会」をつくり、活動している。懇親会終了後、山口県に在職している社会学講座の卒業生を中心に、二十名ばかりの者が集まって、湯田で河野さんを

囲む会を開いた。人口学の分野では著名な学者だから、私などと違って堅固い方ではないかと心配していたが、実にいろいろなソフトな方だった。二次会まで、お付合いいただき、躊躇されたのにもかかわらず、カラオケで一曲歌っていただいた。

河野さんは、いま、日本人口学会の理事をやっておられるとのこと、山口で人口学会を開催してみたいといわれていた。私自身も来秋、山口大学での日本社会学会開催を要請されている。この機会にと思って社会学の同窓生にご協力をお願いしたが、河野さんの山口での学会開催の希望も、なんとか実現してほしいと思っている。

(人文学部教授・社会学)

同窓会偶感

重 中 十 士 朗

(国史学・文理第一回卒)

「歳月は人を待たず」という。恐ろしい程のスピードで己に迫って来る。私達第一期生が糸米校舎を巣立つて早や三十二年。美少年も今や初老の人となった。そんな想いの同窓会の案内を頂いた。

十一月二日、新築の大学会館で開かれた鴻文会総会に初めて出席した。卒業以来初めて会う河野稠東君(社会一回卒人口問題研究所人口政策部長)も田中宏芳君(独文一回卒スボニテ取締役)もすっかり風霜を経た初老の紳士となっていた。久闊を詫びながら話題は自然に学生時代の思出へと遡上したが、若し街で行きずりに会ったとしたら、そのも無縁に終わるかも知れないお互いの変わり様であった。

▼文理学部国史科の一回生。卒業証書は確かに頂いたが、実感は山岳部卒業生である。大先輩創りを奇貨として奔放不羈の学生生活を送ったひとりである。

▼本学も八木学部長の誕生など全く喜ばしいことである。本席はその祝賀の席でもある。将来は本学出身の学長も夢ではない。同窓生諸君大いに連帯し、健闘しよう。乾杯!!

思えば私達の学生時代は、まだ食糧、衣料不足時代。学生の多くは下駄か軍靴をはき、中には兵隊服の者もいた。空服を押さえて街を逍遙したものである。当時私は大神宮下下宿し、眼が覚めた時が朝、眠くなれば万年床に入って就寝、というデカダンスな生活に浸っていた。しかし福尾教授の講義がある日だけは藤本篤君(国史一回卒大阪市編纂所長)が「シゲナカクン学校に行こう」と誘ってくれるのである。今の登校拒否児の元祖みたいなものである。そんな生活のサイクルを断ち切る様に飄然と山に出かけ、雪の大山で越冬したり、屋久島で島の人々と鹿を追って数ヶ月を送ったりした。

だがザックの底に常に数冊の本だけは忍ばせていた。それは史書であり、時に文学書であり、又哲学書でもあった。そして山小屋の中であれ、下宿の万年床の中であれ、読書は己の生活の一部として欠かさなかつた自負は今も強い。

私の母は結婚したばかりの妻(社会三回卒)を呼んで「絶対子供を山に行かせるな」と言っただけ。その妻に私は「子供に本代だけとは不自由させるな」と付言した。幾太郎もサルトルも今は夢幻の世界。だが酔っ払っても読書だけは続けている。

(NHK山口放送局副局長)

鴻文会に出させてもらって

大野 光 生

(中国哲学・文理第四回卒)

昭和三十一年といえ、もうふた昔前になります。こういう機会でない、そんなことも改めて考えたりしないほど、目まぐるしい毎日ですが、今度鴻文会の第二回総会に出席させていただいて、母校がこんなに立派になったのかと、つくづくこの三十年の年月が振り返られました。嫁に出たあと、親許が家を新築し、そこへもどって来たという感じでした。

旧制の山高の建物が、そのまま文理学部として発足し、私の入学した頃は、当時のパンカラ氣質が残っていて、それがいいことか、また、今の大学氣質と比べるべくもありません。まいが、しかし底流として、山大氣質というもの、脈々と流れて、今のうちに、発展したのだと思ひながら、初めて広い構内に散策いたしました。

懇親会では、だれもやらない、たった一人の余興でしたが、なつかしい、ジャック・ブレールの作詞、ジョセフ・コスマ作曲のシャンソン「枯れ葉」を歌わせていただき、自己満足したものです。

ちょうど私の入学した二十七年頃、イブ・モンタンの歌で、一世をふうびしたこの歌が、たまたま、秋深い構内のケアキの葉と重なって、我ながら、センチメンタルな気分ひたつたものです。

同窓会のお世話をされる方々、どうもありがとうございます。卒業生の中にも、発育のよくない徒輩がいます。卒業生の中にも、発育のよくない程度若さをたもてるものと存じます。八木学部長、会長の和田先生。みんな同窓で、

会員の声

こつちもいくら偉くなりたいのですが、集まった皆さんが、そんなこと抜きで語り合えるのも、鴻文会の良いところだと思われ、とても楽しいひとときでした。これからもよろしくおねがいします。

(山口高校教諭)

馬場 憲 三

(東洋史学・文理第一回卒)
高校教師を続けています。会長、和田氏は旧制津和野中学の一年先輩(あだな、和田のハ)講師、河野氏とは「ドリーネ」という詩の同人雑誌の友、懐かしいことです。両師によりしくお伝え下さい。

秋 村 憲 之

(社会学・文理第二回卒)
昨五十九年七月来NHK広島局へ勤務。家庭を東京に残し今流行の単身赴任です。NHKには山口大学同窓の仲間が十人以上勤務して居られますが、横の連絡必ずしも十分とは言えない状況。何とか一堂に会する機会をつくれぬものかと考えておりますが………今回の総会には公私両方の理由で参加できず河野先輩ともお会いできず大変残念です。

井 上 和 男

(国史学・文理第四回卒)

秋、たけなわ、再び、友と酒くみ、肩を組んで、あの後河原を散策したいもの、切角のところ、翌日は仲人としての吉日となり、残念ながら、総会には参加、可ならず。
私達、五十台前半の世代は、いま、こんな人間のしがらみに、微笑しながら、残り少なくなつた表舞台を日々、演じている。
そして、山口からの招きの便りは、私達に過ぎし日々を、淡い痛みを伴いながら、なぞらせる。

瀧澤 (柴田) 桂子

(英米文学・文理第四回卒)
新潟県立豊栄高等学校で英語を教えています。教室の窓から見遙かす越後平野は稲刈りも終り、荒涼と広がっています。馳け足で訪れる冬。やがて雪。暗く長い忍耐の季節が再び始まります。

芹 沢 (佐藤) 園 枝

(英米文学・文理第七回卒)
相も変わらずボ英語教育で子供達と「心」「ことば」「からだ」の相互の問題を考えつづけています。私達が「ことば」を獲得していく過程にこだわりながら第二言語として、英語を身につける方法を模索しています。

徳 政 恒 夫

(英米文学・文理第十回卒)
三十七年三月に卒業、後十年して山口中央高校に勤めることになりました。そして十四年目を迎えています。今のパークロードや後河原あたりを通るとかつての学生時代を思い出します。今はなき鳳陽寮には一、二年のとき入っていました。寮生活は、いろいろ充実していて、良き友にも数多く恵まれました。

村 上 秀 夫

(国文学・文理第十四回卒)
ぜひ一度は参加したいと思いますが、なかなか叶わず残念です。皆様のご発展を祈ります。関西地区の鴻文会の集いなどがもたらしたいと思います。

岡 田 (田村) 千 代 子

(社会学・文理第十七回卒)
二人の息子の子育ても、手がからなくなりつつあり、私自身の人生をこれから始める気概であります。そのうち山口へもと思っております。総会の盛会をお祈り致します。

岡 政 (岡本) 幸 子

(国語学・国文学・文理第十八回卒)
卒業して十五年、平凡な主婦業を営んでいます。先日、テレビに山口が映りましたが、県庁のあたりはすっかり変わったのです。でも五重の塔は昔のままでも懐かしかったです。会報、楽しみにしております。

戸 谷 (藪根) 美 代 子

(英米文学・文理第十八回卒)
三原に来て四年経ちました。子供三人(小五、四、二)にだんだん手がからなくなる反面、親としていろいろな問題に、悩みながらもなんとか毎日を過ごしています。時々同級生たちはどうしてらっしゃるかなど、思いめぐらせる時間も出来て来ましたのでクラス会でもあれば出席したいとも思うのですが。

岡 本 政 則

(東洋史学・文理第二十二回卒)
S.四十五年入学の文学科の有志は毎年、八

月中頃、後河原町の惣野旅館で「洗心会」を開いております。

松 田 (草野) 宏 恵

(西洋史学・文理第二十五回卒)
親子三人(主人、娘)元気に暮らしております。家事や育児に追われ、忙しく毎日を通して、時々学生時代を思いだしなが

津 森 朋 之

(ドイツ語学・ドイツ文学・文理第二十六回卒)
卒業以来、大学の方には、行く機会がありません。会報が来る度に、下宿や近くのたばこ屋のおばあさんの事も思い出され、なつかしい気がします。

森 脇 (池) ま な み

(中国哲学・文理第二十九回卒)
いつも御世話さまで。今年の五月のゴールデン・ウィークの時に何年ぶりかで山口へ行ったとき、大学の方へも足をのばしてあちこち歩いて、また学食で懐かしく食事をしたのですが、立派な大学会館が農学部牧草地の場所に建てられてびっくりしました。

宇 佐 川 智 美

(国文学・人文第四回卒)
新任教員として、日々の授業準備に追われているうちに、いつのまにか秋も深まり、今では、明日の授業より、ほんの少し先のことを考えられるようになりました。生徒が何かをやった、何か一つでもわかったと思える授業ができるよう、わずかつづでも進んでいきたいと思っています。

第十七回卒 同期会

一九八〇年夏、私も第十七回文理学部文学科卒業生は初めての同期会を持ちました。「旧交をあため今ある我が身をもみつめた」との大義名分はあるものの、菓立つて一〇年、ただわけもなく懐しい顔ぶれに会いたいの思いにかられた集いでした。「五年後また山口で」との約束の通り、十一月二日の「鴻文会」総会終了後、湯田の松田屋ホテルにて再会。多いのか少ないのか一〇名の出席



者は、互いの息災を確かめ思い出話に花が咲く、時のたつのも忘れて語り明かし、記念写真の日付も翌三日になるほど。今は、祭りの後姿を見送って潮がひくようなきみしさに身をゆだねています。五年後はいよいよ四〇代に突入し、第一線の皆の行く末にも大きな転機が訪れるかもしれません。

国文学、国史学とじて次回は社会学が担当幹事、研究室まわりもちの同期会運営方式は大成功です。一九九〇年のお盆にはふるさと山口に全員集合。

(添田建治郎・文理第十七回卒・国文学)

社会学同窓会

六月九日(日)、福岡市の法華クラブで、第八回の社会学同窓会を催しました。大本晋龍先生、木下謙治先生をはじめとする在職教官の外、近沢敬一先生、故山本陽三先生の奥様もご参加下さり、同窓生二十余名の卒業生が集いました。

福岡市、および北部九州地方に在住する卒業生は多数いるのですが、今まで一堂に会する機会を得ませんでした。これを機に、広島、東京の同窓会支部にひきつづいて、福岡支部の結成が話し合われました。

(佐々木衛・文理第十九回卒)

独文科同窓会

昭和五十六年十月三十一日の鴻文会発足の日を記念して、その夜第一回の独文科同窓会

同期会 研究室同窓会だより

を開いて以来四年の歳月が流れましたが、その間、独文科では四回の同窓会を行いました。感激の再会の第一回、そして五十八年八月十三日のスポーツに汗を流した親睦の第二回に続いて、今年二回の集まりをもちました。

三月二十三日の同窓会を、我々は二十二年もの長きにわたってご指導下さり、この三月定年退官を迎えられた中野安久先生をお送りする会としました。市内の茶香亭に、二十八名もの卒業生が集まり、先生のご苦労に感謝し、時の過ぎるのも忘れて楽しく歓談したものです。また、この送別会に先だつて行われた大学での先生の最終講義を三十一名の者が懐かしく学生の気持にかえってお聞きしました。四十も五十才も過ぎた者が頭をならべ、真剣に講義を聞いている姿はまさに圧巻でした。中野先生は現在、お元気に福岡市の九州



産業大学にお勤めです。

それから半年後、鴻文会総会の日の夜、七名という少人数でしたが、新たに独文科にお迎えした工藤康弘先生を囲んで、恒例になった湯田の「パンブローナ」で第四回の同窓会をもちました。工藤先生は筑波大のご出身、二十代という若いフレッシュな、気さくな先生で、すぐに我々同窓生の中に溶けこまれ、



我々のエクセントリックなカラオケの声に圧倒されながら、自慢ののどをお聞かせ下さいました。

その夜、湯田の街にも「六甲おろし」が吹きまくりでしたが、そのなかを我々は一人ひとり新たな明日へのチャレンジ精神を心に秘め、再会を誓って、真夜中すぎ、それぞれの家路にむかったのです。

(岡光一浩・文理第十四回卒)

昭和59年度事業報告

- 59. 5. 17 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (和田会長出席)
- 5. 19 第4回役員会
- 12. 20 「鴻文会会報第4号発行

昭和59年度収支決算書

収入の部

| 科 目 | 当初予算額 | 決算額 | 比較増減 | 摘 要 |
|--------|------------|------------|-----------|--------------------------------|
| 繰越金収入 | 3,478,453円 | 3,478,453円 | 0円 | 前年度より繰越金 |
| 会費収入 | 1,400,000 | 2,488,902 | 1,088,902 | (5,000×494) + 3,000円 + 15,902円 |
| 名簿売上収入 | 60,000 | 1,000 | 1,000 | 1982年版一冊 |
| 雑収入 | | 68,850 | 8,850 | 預金利息 |
| 合 計 | 4,938,453 | 6,037,205 | 1,098,752 | |

支出の部

| 科 目 | 当初予算額 | 決算額 | 比較増減 | 摘 要 |
|---------|-----------|-----------|-------------|--|
| 会議費 | 30,000円 | 20,160円 | 9,840円 | 役員会(59.5.19)役員車代18,000円(市内2,000円×3 + 市外3,000円×4)、同茶菓子代2,160円 |
| 印刷費 | 120,000 | 81,500 | 38,500 | 会報印刷作成費(2,400部) |
| 郵送費 | 135,000 | 125,360 | 9,640 | 役員会案内状往復葉書 800円(80円×10)、会報原稿依頼(切手)920円、会報郵送料112,560円(60円×1876)、名簿郵送料1,050円(350円×3)、会費返却郵送料8,230円(20人分)、会費未納者催促郵送料(在校生)1,200円(60円×20)、その他切手600円(60円×10) |
| 寄付金 | 50,000 | 50,000 | 0 | 日中学術交流奨励会 |
| 謝金 | 60,000 | 56,000 | 4,000 | 会報宛名書等アルバイト36,000円、幹事用謝金20,000円 |
| 雑費 | 10,000 | 114,202 | △ 104,202 | マジックペン350円、ボールペン250円、会報用写真DPE代1,000円、白黒フィルム300円、現金封筒(20枚)400円、会費返却金111,902円 |
| 予備費 | 4,533,453 | 0 | 4,533,453 | |
| 次年度へ繰越金 | | 5,589,983 | △ 5,589,983 | |
| 合 計 | 4,938,453 | 6,037,205 | △ 1,098,752 | |

昭和60年6月15日監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監 事 森 田 良 吉 卿
 行 村 和 男 卿

昭和60年度事業計画

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
2. 第5回役員会(6月15日)
3. 第6回役員会(9月7日)
4. 鴻文会第2回総会及び懇親会(11月2日)
5. 「鴻文会会報第5号」発行(60年12月)
6. 「鴻文会名簿1985年版」発行(60年12月)
7. その他

昭和60年度予算

収入の部

| 科 目 | 60年度予算額 | 59年度予算額 | 比較増減 | 摘 要 |
|-------|------------|------------|------------|-----------------------------|
| 繰越金収入 | 5,589,983円 | 3,478,453円 | 2,558,752円 | |
| 会費収入 | 1,400,000 | 1,400,000 | 0 | 新入生5,000円×180、卒業生5,000円×100 |
| 雑収入 | 260,000 | 60,000 | 200,000 | 証券、預金利息ほか |
| 合 計 | 7,249,983 | 4,938,453 | 2,758,752 | |

支出の部

| 科 目 | 60年度予算額 | 59年度予算額 | 比較増減 | 摘 要 |
|-----|-----------|-----------|-----------|---|
| 会議費 | 160,000円 | 30,000円 | 80,000円 | 役員会 {茶菓子代3,000円+車代27,000円(市内2,000円×9 + 市外3,000円×3)} × 2 |
| 印刷費 | 940,000 | 120,000 | 820,000 | 総会費用その他100,000円 名簿印刷作成費(2,500部) 700,000円、 会報印刷作成費(2,500部) 120,000円、 その他20,000円 |
| 郵送費 | 1,162,400 | 135,000 | 827,400 | 役員案内状往復葉書 1,200円×2、 名簿作成用住所等確認切手(40円×2,400+60円×2,400)、名簿・会報郵送料350円×2,000 総会・懇親会案内郵送料(40円+60円)×2,000 その他20,000円 |
| 寄付金 | 50,000 | 50,000 | 0 | 日中学術交流奨励会 |
| 謝金 | 139,000 | 60,000 | 41,000 | 名簿作成用宛名書等アルバイト38,000円 総会・懇親会案内宛名書等アルバイト38,000円 名簿・会報発送宛名書等アルバイト38,000円 幹事用謝金15,000円、その他10,000円 |
| 雑費 | 33,000 | 10,000 | 23,000 | 名簿・会報用写真3,000円、文具類20,000円、 その他10,000円 |
| 予備費 | 4,765,583 | 4,533,453 | 967,352 | |
| 合 計 | 7,249,983 | 4,938,453 | 2,758,752 | |

昭和五十九年度
人文学部卒業生就職状況

卒業者数 一七四人
就職者数 一三六人
大学院進学者数 五人
昭和六十年四月現在 (一)内は女子

Table with columns for industry sectors (e.g., 製造業, 卸売, 小売, 金融, 保険, 証券, 不動産, 運輸, マスコミ, 情報処理, 広告, 教育, 公務) and rows for counts. Total count is 131 (74 women).

昭和60年度 講座別学生数

60. 4. 1 現在

Table showing student numbers by lecture (e.g., 人文学科, 哲学, 中国哲学, 日本思想史, 美学・美術史, 国史学, 東洋史学, 西洋史学, 考古学, 社会心理学, 社会人類学, 語学文科学科, 国文学, 中国語学, 英語学, 英米文学, ドイツ語学, フランス語学, 言語学) and total counts for each year (77, 89, 78, 244).

通信・お願い

☆ 今春、人文科学研究科(大学院・修士課程)の設置が実現しました。地域文化専攻と言語文化専攻の二専攻で定員は八名です。今春は、地域文化専攻六名、言語文化専攻三名の入学がありました。地域の要請に根ざした専門研究と教育の充実に貢献できれば幸いです。

☆ 鴻文会の結成以来、各研究室単位の同窓会活動も活発になってきたようです。今年度は、独語・独文、国語・国文、東洋史、社会学が総会を開いています。また、名簿の整理なども進んでいるようです。鴻文会の活動も然る事ながら、こうした研究室単位の同窓会活動の一層の盛会をお祈りいたします。

☆ 鴻文会名簿一九八五年版が出来上りました。前版に比べ活字も大きくなり、利用しやすいようになっていきます。活発な同窓会活動、同窓生間の交流に利用していただければ幸いです。なお、今回の名簿は会費でまかなうものとし、会員には無料で配布します。

☆ 役員会へ、ご意見、ご希望、ご批判等、なんでも結構ですから、お便りを下さい。又、会報についてもご希望をお聞かせ下さい。会員諸兄の随想等、ご投稿を歓迎します。

会費未納の方は至急お納め下さいませ
ようお願いいたします。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座 下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

編集後記

●「会報」第五号は、第二回総会特集号にいたしました。従って、「私の中の山・山口」と「いま山・山口」はお休みしました。次回より続けたいと思っておりますので、ご協力を願います。
●第二回総会、思えば参加者は思いのほか少なかった。私などは大いにショックをうけています。会員の皆さんの鴻文会への想いがこの程度だと決して思いたくはございませんが、やはり時期が悪かったのでしょうか(そういえば、タイガースの日本一の日だった)。次回の総会のことでもあります。真剣に多くの卒業生のきていただける時期を考えたいと思います。ご指導、ご教示を仰ぎます。
●今回役員会は、色々趣向をこらして、種々の催し物を考え、総会を盛り上げようと思いましたが、公開講演、マンドリン演奏など……特に公開講演では、忙しい合間をぬって、東京から河野さんに来ていただき、市民・学生など八十名近い聴衆は示唆に富んだ人口問題についてのお話に魅了されました。河野さん、どうも有難うございました。
●懇親会には五名の恩師の先生をお迎えし、大変懐かしい一時をすごすことができました。又、田中先生はじめ諸先生から、玉稿を戴きました。
●心から感謝申し上げます。
●今号には、会員の皆様のお便りから十五名の方の近況・ご意見を掲載しました。こういう形でお互いの様子を確かめ合うのも、又楽しいものかと思えます。多数のお便りをお待ちしております。
●山口近辺に在住の者で構成しております役員会のメンバーが第二期目をむかえ、若干変更しました。が、お仕事のご都合で今回、役員をおりられた松崎さんに、四年間のご感想をいただきました。
●クラス会、研究室同窓会などをされたところがありません。是非お知らせ下さい。又、お集りの計画、希望等など、この紙面をお使いになって、同窓の輪をさらに大きいにされれば会報も生きてくるかと思えます。
●ところで会報も早や第五号となりました。会報は会員の皆様にはどのように映っているでしょうか。記事の割り付け、内容等、ど素人が忙しさの中で行っています。積極的なご意見をお寄せ下さい。
●すでに師走に入りました。本年は色々お世話になりました。来年度も頑張りたいと思っております。よろしくお願致します。皆様、よいお年を!!